

草原利用・環境教育等の推進に関する基本的考え方（案）

「草原利用・環境教育等の推進」とは

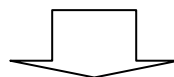
- ・ ここでいう「草原利用・環境教育等の推進」とは、まず「草原利用によるエコツアー・環境教育等」の推進を指すものとするが、それを通じて農・畜産業への支援や地域活性化にも貢献できるような、幅広い内容をもった草原再生の取り組みの一つと考える。
- ・ 「草原利用によるエコツアー・環境教育等」とは、
 - * 草原という場を活用することにより、草原という自然生態系やそれを維持するしくみ（農業を始めとする人のかかわり）それに伴って形づくられてきた地域の生活文化を学習したり、さらにいったん損なわれた草原を再生させることのむずかしさを理解するために行う環境教育や自然体験、エコツアーなどを指すものとする。

草原再生を進める上での「草原利用・環境教育等の推進」の位置づけ

- ・ 草原再生は地域の農業・畜産業の力によるところが大きいが、同時に多様な人々のかかわりも必要である。このため「草原利用・環境教育等の推進」を通じて、都市住民を始め維持管理に直接従事する農業者以外の人々に対し、草原や阿蘇の農業・畜産業への理解を促進し、それによって草原保全・再生を進めることへの合意を得るとともに、保全・再生への参加や協力など積極的な関与を求めていく。維持管理に従事する地域の人々に対し、草原の価値やすばらしさを再認識してもらい、それによって草原保全・再生に取り組むことへの合意を得るとともに、維持管理に従事することへの自信や誇りにつなげていく。

「草原利用・環境教育等の推進」によってもたらされる効果

- ・ 草原の保全・再生へ向けての国民的合意が形づくられる
- ・ 「草原再生」そのものが、自然の複雑さ・奥深さや人のかかわりのだいじさなどを理解する環境教育の場となる
- ・ 地域イメージの向上をもたらし、あか牛肉販売の拡大を始め、地域産業の活性化にもつながる
- ・ 幅広い人々が阿蘇にやって来ることによって、消費活動が誘発され地域経済が活性化する



「草原利用・環境教育等の推進」にあたっての考え方

上記のような位置づけの下で、より大きな効果を生み出すために、かかわるすべての人々の協力により、以下のような進め方が必要と考えられる。

<前提として>

- ・ 幅広い人々の草原への関心を喚起し理解を求める
- ・ 関係者（地権者、産業振興関係者など）の了解・合意の下で進める
- ・ さまざまな実施主体による多方面からの取り組みにより実践していく

<進め方に関して>

- ・ 草原生態系と維持のしくみを、歴史を含めて総合的に理解できるようにする
- ・ 地域環境への負荷をできるだけ少なくし、持続可能な利用を進める
- ・ 地域の人々や1次産業が積極的にかかわる（地産地消、案内人など）
- ・ 牧野組合どうしの連携や地域内の産業間のつながりを深めるきっかけとなるようにする
- ・ 利用者に草原保全・再生への参加を促し、幅広い支援・協力を求める
- ・ これらの組み合わせにより、阿蘇独自の環境教育等の方法を創り出す

<必要な仕組みや拠点づくり等に関して>

- ・ 草原再生への参加・協力の仕組みをつくり広める（ボランティアによる支援、協力金、産品購入など）
- ・ 拠点整備等を通じて、学びの機会の充実や情報発信機能の強化を進める（プログラム、案内人システム、情報発信拠点、施設整備やネットワーク化など）

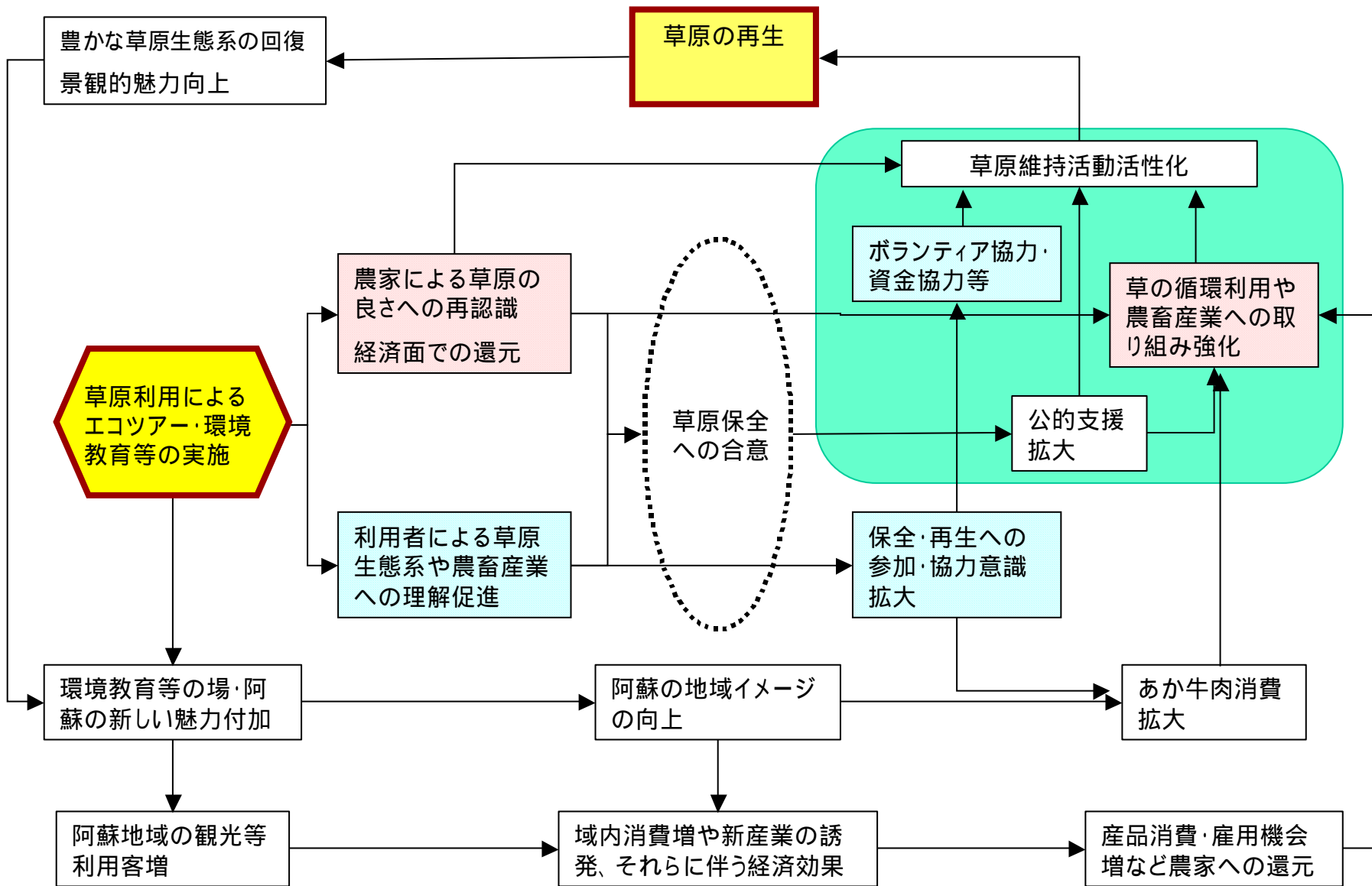
「草原利用・環境教育等」の具体例

種別	実施主体	事業・活動の内容
地元の人や自然を主人公とする新タイプのツーリズム	阿蘇地域振興デザインセンター	地元の人々と交流しながら阿蘇の自然や歴史文化にふれてもらう「阿蘇カルデラツーリズム」を掲げ、ゆっくり歩く・自転車で走る「スローな阿蘇づくり」などとセットでモデルツアーを実施。「自然案内人」の体制づくりも試行。
修学旅行生の農家民宿、農業体験	阿蘇グリーンストック財団	2000人に及ぶ修学旅行生を受け入れ、農家に宿泊し、牛の飼育、田植えなどを体験するファームステイを実施。
牧野開放による自然体験・交流	木落牧野組合	野焼き支援ボランティアとの交流として牧野を開放し、ワラビ採りなどを実施。
草原利用に関わる生活文化の体験	阿蘇地区パークボランティアの会	古くから草原と集落を結び牛と人が行き来した外輪壁の「草の道」を歩き、自然解説と併せて地域のいとなみへの理解を深める催しを実施。
地域の自然・食・文化情報の発信	阿蘇広域観光と地域づくり連絡協議会	自治体の枠にとらわれず、地産地消とツーリズムをテーマに阿蘇の魅力をPRするサイト「阿蘇ファン」開設運営。

添付資料

【フロー図】草原利用によるエコツアー・環境教育等がもたらすもの
 【参 考】体験型ツアーとしての草原利用の仕組みづくり検討例

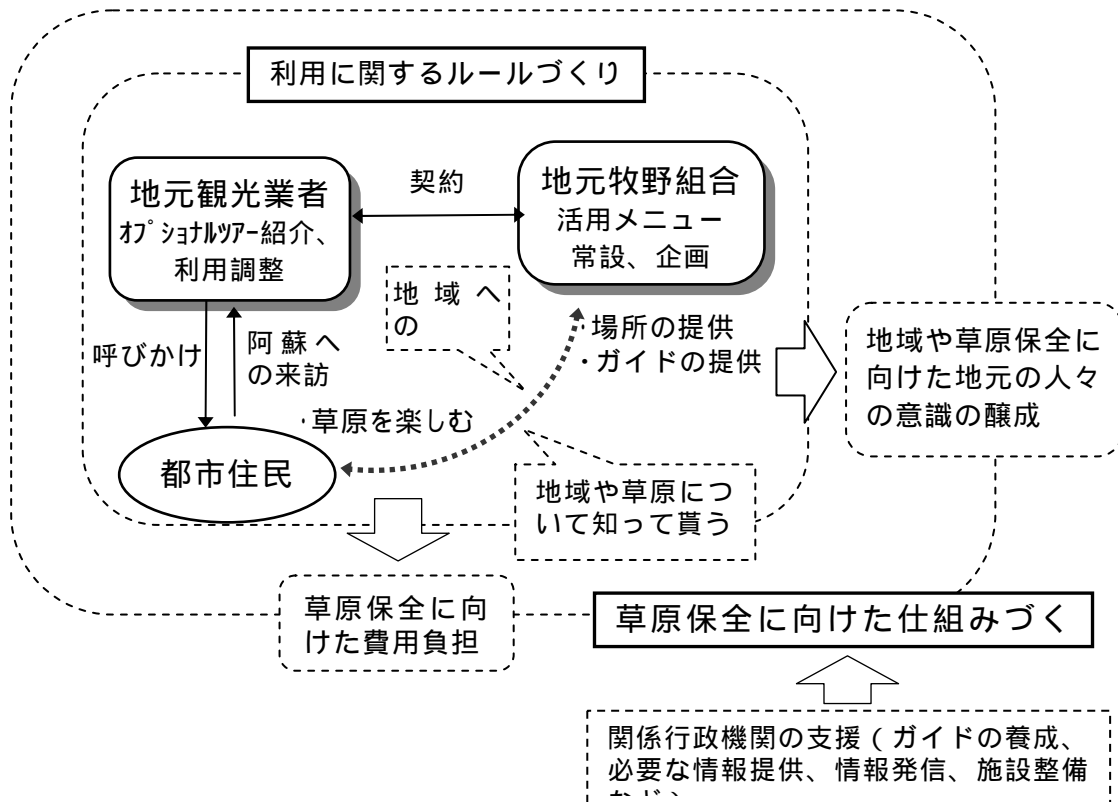
草原利用によるエコツアー・環境教育等をもたらすもの



【参 考】体験型ツアーとしての草原利用の仕組みづくり検討例

関係者の役割と必要な仕組み

- ・ 地元牧野組合：草原利用のメニューを用意するとともに、立ち入りにあたってガイドを務める。
- ・ 地元観光業者：牧野組合との契約のもと、都市への呼びかけ、宿泊者への草原利用のメニューの紹介、受け入れを行う。利用者の管理、ツアー費用の精算等を受け持つ。



ホテルなど観光業者とのタイアップで受け入れる仕組みを作ることを前提とした活用例

- * 春の湿原ツアー。希少種保護の問題から、モラル面で人選が必要と考えられる。支援ボランティアに対するお礼として行うことも考えられる。
- * 地元や熊本市内の小学校の遠足・環境学習・総合学習の場としての活用。
- * 「草の道」を利用して牧場まで歩く。パークボランティアなどのガイドで地域の生業・文化に触れながら石畳の道を歩き草原に至る。
- * 複数の牧野を利用した草原歩き。複数牧野の協力により草原景観や自然観察を楽しむ草原トレッキングのコースを設定して実施する。
- * 北外輪から久住の山々を望む。例えば、車で格納庫まで行き周辺で、波打つ草原の広

がりや久住連山の景色を堪能し、歩いて帰ってくる。

- * 森林境におけるバードウォッチング、など。

いくつかのコースに分散して楽しんだ人々を、例えば監視小屋前に集め、農産品を持ち寄った市の開催やバーベキューなどにより交流を図ることも考えられる。

牧野に立ち入るために必要な条件設定やルールづくり

- 具体的に立ち入り可能（実施可能）と思われる場所の設定。
- 立ち入りが可能と思われる時期の設定。
- トイレなど立ち入ることにより必要となる施設の設置。
- 入場者のタイプや人数の限定。例えば、小中学生の野外活動や修学旅行など教育的目的のみなど。
- 立ち入りに際して、最低限決めておく必要がある事柄。例えば、ゴミの持ち帰り、動植物の採集禁止、指定場所以外で火は使わない、など